

幼児の生活に見られるオノマトペ

～音楽的意義と活用への一考察～

Onomatopoeia in diary activities of childhood

—A study of its musical meaning and practical use—

武 田 道 子

TAKEDA Michiko

I 序論

オノマトペ「onomatopoeia」は、広辞苑によれば、擬音語に同じとし、ある音に似せて人工的に作り出す音、実際の音をまねて言葉とした語と定義付けている。

谷川俊太郎は「音楽教育におけるリズムを再考する」のインタビューの中で、「オノマトペとか喃語的なことばは、ほとんどノンセンスですね。だけどそれは言葉を習得する上でも、あるいはことばの豊かなものの一部分としてとても大事だと思います。～オノマトペ的なもの、あるいはノンセンスなものは、意味よりも事物の実体の肌触りみたいなものをそこで生んでくれる～」と述べている。

確かに、オノマトペはそのものの意味よりもそのリズムやイントネーションを通してイメージされた実体が、感情に訴えて伝わって来るものである。しかしまた、オノマトペ自体が、ある意味を持った言葉としての役割を果たしている事も多い。例えば、痛みの症状を表現する時に チクチク シクシク ヒリヒリ キリキリ ズキンズキン ガンガン等、すべてオノマトペであるが、その痛みの度合いや症状が伝わってくる。オノマトペ自体がその意味を伝えているのである。その事を考える時、言語獲得の途上にいる幼い子どもたちにとって、短い言葉で繰り返されるオノマトペの存在は大きいといえる。

以下は、まど みちおの詩である。

『うがいのうた』

かみなり うがいは くち あける ごろごろおろろん がらがらがら

のどまで きれい

ふくれんぼ うがいは くち しめる ぐぶぐぶうるん ごぼごぼごぼ

どのはも きれい

正に、オノマトペを多用し、それは現実の音と重なって子ども達にも容易にイメージする事が出来る。また表現への意欲を喚起する働きも持っている。さらに、この歌を歌う事により、うがいや歯磨きを誘発し習慣化するという用的機能をも有している。

このように様々な役割を有しているオノマトペを、保育者が保育中にどのように使用しているのかを

調べた研究もある。

近藤綾・渡辺大介（2009）らは、保育者の保育活動におけるオノマトペの使用について、「オノマトペ無しでは声かけが成立しえない場面が数多く確認された。オノマトペが発言の中で重要な要素になっている事を意味している。」と結論づけている。

また、以下のように保育活動での表れを3つの分類でまとめている。

1 五感に基づく分類

- ・動作に関するオノマトペ使用が最も多い
- ・気分・心情に関するオノマトペは最も少ない

2 使用用途・文脈に関する分類

- ・説明についてのオノマトペ表現が最も多く用いられる。

3 オノマトペの有無による文の成立・不成立に関する分類

- ・直接的な用途で使用している可能性がある。

さらに、山口仲美（2003）は、「俳句に擬音・擬態語（オノマトペ）を取り込んだ場合、その占める割合は、ほとんど句の死命を制するほど大きい。古今の俳人たちはいかにオノマトペを使いこなしてきたか～」として、俳句を201首、短歌を100首原文で紹介している。

このことから、日本人が日常の生活の中で、自然にオノマトペに親しんできている事が分かる。それは、幼児にあっても同様である。まして幼児にとっては、ことばの発達過程で、実に多くのオノマトペが出現している。

そのようなオノマトペを幼児の音楽教育に活用する意義は大きいと考えられる。

そこでまず、幼児の身の回りでどのようなオノマトペが見られまた発現しているのであろうか。以下の3つの資料から、収集・分析していきたい。

1 日常の子どものつぶやきことばからの収集

2 こどもの遊びの中での収集

3 幼児の歌唱教材からの収集

以上、集められたオノマトペを精査し、音楽的要素について明らかにする。さらに、実際の指導に取り入れるための方策その試案を構築するのが、本論文の目的である。

Ⅱ 遊びに見られるオノマトペ

1 日常の子どものつぶやきことばからの収集

「つぶやきことば・こころのめ」は、保護者や保育士が平成23年～26年間のこどものつぶやきことばを収録したものである。

その中から、年少・年中・年長の例を数編挙げることにする。原文はすべてひらがなであるが、読み易くするため漢字を交えて表記した。

- ・（2歳7ヶ月）保育士と子どもの問答（保）「～犬はなんて鳴く～（子）わんわーん～（保）ぺんぎんは～（子）ぺたぺた～」
- ・（3歳）「お腹の虫が かりかりする」～母のコメント（お腹をぽりぽりかきながら）
- ・（3歳8ヶ月）からすが信号機をつついていたのを見ながら「びっぴ 信号 たべちゃうね」

- ・（3歳9ヶ月）足がしびれた時「足が しゅくしゅくする 歩けないよ これじゃ」
- ・（3歳10ヶ月）かき氷とゼリーのどちらにするか迷っている時「しゃき ひえ ちゅる ぶるう しるりる わあ まよちゃう」
- ・（4歳0ヶ月）洗髪中に耳に水が入ってしまって「耳が ごそごそ しゃべる」
- ・（4歳1ヶ月）～お絵描きをしながら「（子）心が ふわふわする～（母）どうして～（子）うれしいから」
- ・（4歳2ヶ月）「虫歯って しってるよ 剣を持ってて びしびしって するんだよ」
- ・（5歳3ヶ月）「（保）人間って なんて出来てると思う （子）粘土で出来てると 思うんだ だってさー ふにゃふにゃしてるじゃん 肌色の粘土で 出来てるんだよ」
- ・（5歳7ヶ月）入浴中お腹をゆらゆらさせながら「お餅が ぶっかぶかあ お餅を沢山食べたからお腹の中に沢山いるよ」
- ・（5歳10ヶ月）「わたし 泡立て器 混ぜている時 くるくるダンスを してるみたい 私も 一緒に くるくる 踊ちゃう」

以上に見るように、家庭でも園でも子どもたちはあらゆるシーンで巧みにオノマトペを使いこなし、会話をスムーズにしている。さらに、オノマトペによって、子どもたちの心の中に秘められたイメージが、珠玉のような輝きを持って人に訴える力を持っている事が分かる。

2 こどもの遊びの中からの収集

以下は、筆者が収集した資料からオノマトペの事例のいくつかを挙げる。

- ・お医者さんごっこをしながら「お腹の音を 聞かせてください 背中も ぼん ぼん ぼん お金を払ってください」
- ・猫のエプロンのアップリケをみて、「ニャーニャー ねこねこ ニャーニャーニャー」
- ・一人の子の即興の歌に、他の女兒がメロディをまねて一緒に「ニャーニャー ねこねこ～」と歌い継ぐ。
- ・ヒーローごっこで、「シャキーン」「テッテッテ」
- ・ボウリングで母親に「上手だね」とほめられて「ティッカ ティッカ ティッカン」とスキップして歌いながら自分の場所に戻る。
- ・足を洗う為に、たらいにジョウロで水を入れながら「プチュ プチュ プチュ」
- ・カタツムリを手の上ではわせながら「ニョロ ニョロ ニョロー ニョロ ニョロ ニョロー」
- ・スキップの練習をしながら「ピョコ ピョコ ピョコ ピョコ ピョコ ピョコ」
- ・ブロックで作ったロボットを動かしながら「バキューン バキューン バキューン」
- ・段ボールの電車に2人で乗り「ガッタンゴットン ガッタンゴットン ガッタンゴットン ガッタン」
- ・木にしがみつきながら蟬になりきって「ミーン ミン ミン ミーン」

以上、自らの行動をスムーズにしたり、活動を盛り上げたり、また嬉しさ楽しさがオノマトペによって効果的に表されている。また、お医者さんごっこや電車ごっこ等、ごっこ遊びではオノマトペが多用

されている。手の上にはわせたカタツムリの事例では、オノマトペのつぶやきの中に、カタツムリに対する幼児の優しさも伝わってくるのである。

3 歌唱教材からの収集

1) 幼児の歌唱教材の特徴

幼児の歌唱教材（特に題材面）の特徴を簡単に挙げると次のようである。

- ・オノマトペが多用される。
- ・かけ声や繰り返される言葉が多い。
- ・生活・季節・行事・自然・花・動物（生き物）・乗り物・夢やあこがれ・お話・その他、子どもの生活や遊びに結んだ題材が多い。

以上の事から、歌唱教材でのオノマトペの使用は多いと推測出来る。

2) オノマトペ使用の実態

ア) 使用頻度

子どもの歌 826 曲中どの位の頻度で、オノマトペ表現が表れるのかを調査した結果、500 曲がオノマトペを用いていた。何と 61% の割合である。また使用されたオノマトペ表現は 1050 語見られた。1050 語については、同一曲中、同一表現は削除した。しかし、曲が違う場合は 1 語として結果に含めている。同一曲中に、数種類のオノマトペ表現が使われている曲、また 2～3 種類のオノマトペ表現を使用している曲が最も多い事が分かった。予想した以上の結果である。

イ) 内容分析

使用されているオノマトペについて、擬音・擬声・擬態表現のうち、どのジャンルが多く使用されているのかを精査した。

・擬音

リンリン～鈴、ドンシャラン～祭りのお囃子、ギッコンバッタン～シーソー、ボタン・ピッタン～雨だれ、チリン・チリン～三輪車、チャプチャプチャプ ザンブリコ～波、チクタク～時計、キュキュルキュル～つり草、ゴロゴロ～雷、ジャンジャン～シンバルなど、物音を表したオノマトペ表現は、全体の約 40% であった。

擬音は直接、子どもの耳にストレートに入ってくる。例えば、言葉を覚える初期段階で、車をブーブー、消防車はカンカンブー、電車はシュシュポーと言うのもその例である。

以上から、擬音のオノマトペは、音楽指導活用への示唆を与えてくれる。

・擬声

ピヨピヨ～ひよこ、チュクチュクピー～小鳥、メーメー～羊、ケロケロガーガー～蛙、ウオウウオウ～ライオン、ワンワン～犬、モウモウ～牛、バーブーブー～赤ちゃんなど、実際の声や鳴き声をまねてのオノマトペは約 20% 弱であった。この中には、「ランラン・ヤッホー・ヨイコラドッコイ」などのかけ声も含めている。

擬声表現はもう少し高い頻度で使われているのかと予想していたが、予想を下まわった結果である。そのほとんどが、身の回りの動物や生き物、人の笑い声などの素材が多かった。

・擬態

キョロキョロ～見渡す、ブラブラ～象、ピョンピョコ～うさぎ、フワフワ～風船・雲、ニョキニョ

キ・チヨキチヨキ～芽ばえ・かに、スイスイ～魚・つばめ、モグモグ～らくだ、ヒラヒラ～落ち葉・
ちょうちょ、テクテク～散歩、グルグル～木馬・水すまし、ブクブク～石けんなど、物事の動作・
動きを言葉で表したオノマトペは、全体の約40%を占めていた。

物事の動きを表現する為に、オノマトペを使う事により、イメージがより喚起され、そのものに
表情を与え、明確な形で思い描く事が出来る働きをしている事が分かる。子どものつぶやきことば
の中にも、またこどもの遊びの中でも、言葉では言い尽くせない表現をオノマトペが命を吹き込ん
でいた。

擬態語での音楽指導への活用の意義は大きいと言える。この擬態語でのオノマトペ活用は、単な
る言葉の表現だけに終わらず、からだの動きを伴っての表現に発展する可能性が大いに期待される。
以上、幼児の身の回りでどのようなオノマトペが見られるのかを述べてきた。
次に、収集したオノマトペを音楽的に分析していくことにする。

Ⅲ オノマトペの音楽的意義

オノマトペの音楽的意義についてまとめると次のようである。

1 リズムの側面

- ① 短い単語で発せられる。
- ② リズムが単純である。
- ③ 繰り返しのリズム表現が多い。

例) ごぼごぼ (タンタン)、ちょこちょこ ちょこちょこ (タタタタ タタタタ)、ガッタン ゴッ
トン (タターン タターン)、ピョッコピョッコ (タッカ タッカ)

- ④ 大半は2拍子系である。

以上の特徴は、乳・幼児にとって表現し易いというメリットがある。

2 イメージの側面

- ① 体験に基づくイメージの側面

子どものつぶやき集に見られる事例の中で、かき氷とゼリーのどちらにするかまよっている時に
発せられた「しゃき ひええ ちゅる ぷるう しるりる わあ まよちゃう」のオノマトペのオ
ンパレードは体験に基づくイメージ表現であろう。

また、大人になって、「ざわざわする音は怖い」とか「ざわざわする音は好きではない」また「キー
という音は不快」「キーって音はぞっとする」など、これらも経験によって受け取るイメージである。

- ② 実音から直接受けるイメージの側面

机をたたく音を「トントン」「コンコン」「コツコツ」「ドンドン」や乳幼児のことばの発達から
「ニャーニャー ブーブー チュンチュン」など、実際耳に聞こえる音の再生は、物の名前を覚え
る以前から発現されている。

- ③ 言葉の体験に基づくイメージの側面

雨がシトシト降る サラサラしてる また 風がソヨソヨ・ピューピュー吹く、モクモク雲が浮

かんでるや遊びの中の事例に挙げられたお医者さんごっこをしながら「お腹の音を 聞かせてください 背中も ぼん ぼん ぼん お金を払ってください」なども、その例である。

さて、①②③に関わる音楽的意義として、表現活動の場面での強弱感の育成も見逃してならない。オノマトペは強弱感育成の為の格好な素材となり得る。

3 その他

オノマトペは、危険を回避すると言う効用も考えられる。例えば危険を感じる音ガッちゃん（何かが急激にぶつかる音）・ドカーン（大きな物が落下する音）など、子どもたちにオノマトペで表現させる事も有効であると考えられる。

さて、受容した音による受け止め方、その表現やイメージの仕方は多種多様である。例えば、昔話の「桃太郎」の四誌に例をとれば、「大きな桃が～どんぶらこっこ ざんぶらこ どんぶらこっこ ざんぶりこ」・「大きな桃が～つんぶ かんぶ つんぶ かんぶ」・「大きな桃が～どんぶら こんぶら すっこんこん」・「桃が～つんぶく かんぶく つんぶく かんぶく」と作者によっての表現は様々である。

さらに、人によっては不快な音も、体験から快く感じるという例はよく見られる。特に乳児の場合、おむつが濡れていたり、お腹がすいていたり、眠い時に聞いた音等、生理的に不快な時に聞いた音は、それがどんなきれいな風鈴の音であっても不快と感ずる場合もある。この辺りの事は、指導上留意しなければならない。

IV 活用への実際

音楽的意義から考察すると、以下3点がオノマトペ表現を生み出す鍵であると考えられる。

- ① 体験に基づくイメージの側面
- ② 実音から直接受けるイメージ
- ③ 言葉の体験に基づくイメージ

幼児の遊びや保育活動の中で、オノマトペを使用し意識的に話したり聞いたりする事が重要であろう。前述のように、保育活動中の保育者のオノマトペの活用の研究に見られた「オノマトペ無しでは声かけが成立しえない場面が数多く確認された。オノマトペが発言の中で重要な要素になっている事を意味している。」と言う結果も、指導への示唆を与えている。

さて、音楽指導への活用として、いくつかの方法を試みたい。

まずはじめに、ドイツの子どもの音楽学校で扱われているオノマトペを活用した事例を置く事にする。「音の持つリズムへの興味づけ」（図1・図2）

それぞれの音の特徴を視覚で捉えられるように現わしている。実際の指導は、音声テープを使用して、図1の音源を再生し、図2からそれぞれのリズムを当てっこするという遊びである。

つまり、物音に興味を持たせると言う点では、我が国の幼稚園教育要領の「表現」の内容「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり楽しんだりする。」という項目に一致する。

幼児期の音楽活動は、まず音に気づく～音の探索から始まる。その意味で、視覚化する事の意義は大きいと考えられる。指導への示唆を与えてくれるものである。

図1 音源

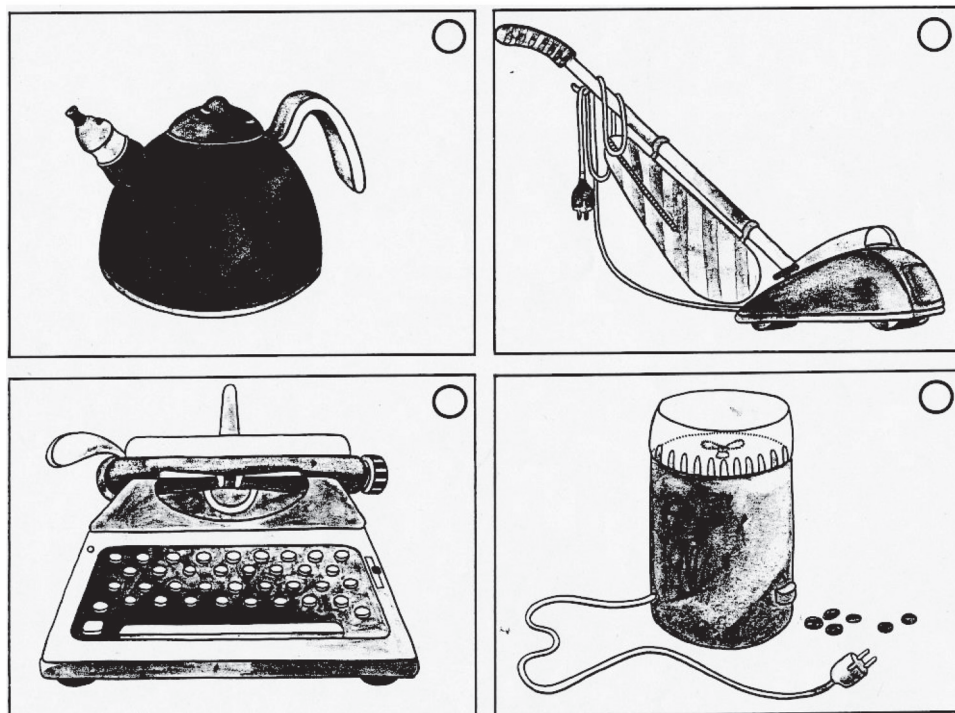
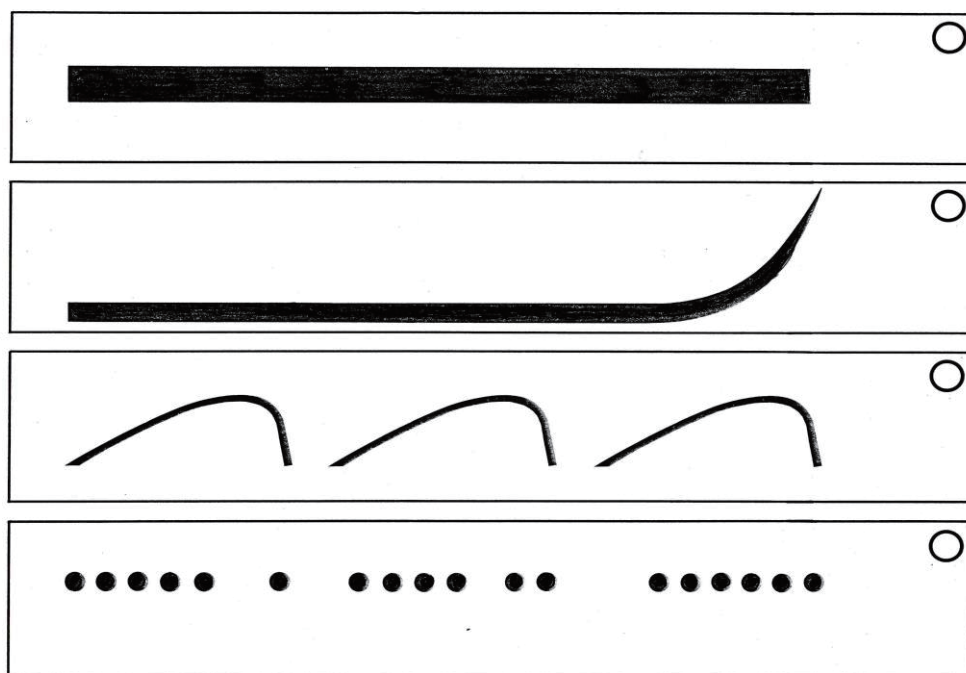


図2 リズム譜



さて、子どもに生かす指導へのキーワードは、即興あそびを柱とした活動という事になろう。そしてその内容を、次のように捉える事が出来る。

- ①擬音奏の活用による楽器遊び
- ②オノマトペによる歌（言葉）あそび
- ③動きによる表現あそび

④その他、絵本やお話などを活用した表現遊び

以下、その活用の実験を試みたい。

1 擬音奏の活用による楽器遊び

1) 身の回りで聞く音の模倣～即興的音遊び

ア) 雨だれあそび

- ・雨だれの音体験～様々な媒介（缶・紙コップ・水の入ったバケツ・傘の上等）を使って雨だれの音体験～観察
- ・体験した音の言葉によるオノマトペ表現
- ・似た音探し
例) 缶や紙コップをバチでたたく。ウッドブロック、木魚、おもちゃの太鼓等、素材の異なるバチを工夫して、雨だれ遊びを楽しむ。リズム・強弱の工夫の側面を忘れないようにする。
- ・「あまだれポットン」（村上寿子曲、一宮道子詞）・「雨だれトントコトン」（滝口としお曲、小林昭三）・「あまだれこぼらず」（飯田秀一曲・詞）・「あられ」（葛原しげる曲、梁田 貞詞）等の歌に合わせて、歌いながら自由な音遊びを楽しむ。

イ) 音さがし

- ・子どもの身の回りにある身近な音探検
例) 風鈴・おもちゃのガラガラ・卵等のパック・木の実を転がす・小石を打ち合わせる 貝殻をこすり合わせる等、叩いたり、こすったり、振ったりしての音の探検
- ・探した音の発表会～それぞれの音のオノマトペ表現遊び

ウ) 似た音探し

- ・動物や身の回りのものを音で表現する。
例) かえる（貝殻の擦り合わせ）、猫（おもちゃの猫やアヒル）、車のクラクシヨ（鍵盤ハーモニカ・らっぱ）、足音（コツコツ・ペタペタ・トコトコ・ドスンドスン等）、祭りのお囃子（空き缶、鈴、拍子木、太鼓等）の音探し
- ・手作り楽器
幼稚園教育要領の内容にある「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」に一致するものである。年長児の興味・関心を満足させる内容である。
例) 手作りギロ、手作りマラカス、手作り太鼓、手作り笛等の制作と活用

2 オノマトペによる歌（言葉）あそび

1) 遊び歌への適用

- ・わらべ歌の中で、例えば「かごめかごめ」での「～後ろのしょうめんだーれ～」の歌に続いて、鬼が様々な鳴き声を要求して後ろの子どもの名前のヒントを得る。その時、鬼は3つ打ちの手拍子をうちながら、呼びかける。答える子どもは、鬼から与えられた動物の鳴き声を、やはり3つ打ちのリズムで答えるというルールである。つまり3つ打ちの手拍子にのって鬼が、「いーぬ」（犬）と唱

える。答える方も3つ打ちの手拍子にのって「ワンワンワン」と答えるという訳である。この3つ打ちの手拍子が大切である。一声での「わん」では、リズムが構成されないからである。

曲例はいくらでもある。例えば、「かりうどさん」のわらべ歌では～今日の獲物は何ですか～の問いに続いて答えるという遊びでも応用出来る。

さて、以上のような遊びを、盛り上げ持続させる為には、それなりの導入が必要である。次項目5)に関連するが、素材となる動物の名前や鳴き声遊びが充分に行われる事、またその際、言葉や動きの模倣を伴っての遊びである事が大切である。イメージ豊かな表現育成への第一歩であるからである。

例) カバ=ヴォーッ ブォッ ブォッ、ゴリラ=ウホッ ウホッ、サイ=ファオーン ファオーン、
ぺんぎん=ウワウウウウウ、その他、虫の声や鳥の声など。なお鳴き声に限らず擬態や擬音、
例えば、狸～ポンポコポン、蛇～にょにょ等の表現も含まれる。

2) オノマトペによる言葉遊び

・擬音表現では、リズムの側面が中心的なねらいになる。例えば、波のオノマトペ表現は、チャブ
チャブチャブ・ザーザーザー・ザブーンザブーンなど、必ずリズムが伴う。チャブチャブチャブの
1拍打ち、ザーザーザーの2拍分のリズム、ザブーンザブーンはアウフタクトのリズムである。こ
れらのリズムを、前述のドイツの音楽遊びの中で紹介した事例のように、リズムを視覚化する事も
忘れてはならない。幼児期において、そのままリズム譜を描くという事はナンセンスである。あく
までもあてっこ遊びである。

以上のように、擬音表現は、風の音・雨の音・雨だれ・波・電車、バスの音・時計の音など、子
どもの身の回りにはたくさんの素材がころがっている。

・擬声表現では、表情の工夫の側面も重要である。例えば、ポチが甘えている時は？

怒っている時は？ミルクが欲しいよと言っている時は？等そのものの気持ちになつての表現遊び
でなければならない。イメージ豊かな表現への芽生えを育てる事に繋がっているからである。鳴き
声に始まって、笑い声などリズムや表情のイメージ豊かな表現の素材は事足りないであろう。素材
の例としては、前項で述べた通りである。

3 動きによる表現あそび

・色々な物の動きをオノマトペで表現する。つまり擬態語表現である。

例えば、歩き方のオノマトペ表現では、よちよち歩き・ちょちょこ歩き・テクテク歩き・ブラ
ブラ歩き・ノーロノーロ歩き、またスキップ、小走り等、そこにもリズムが生きている。

落ち葉の散る様子（ヒラヒラ、パラパラ、クルンクルン、フワフワ等）、シャボン玉（ブクブク、
ポアポア、ヒラヒラ、プアーンプアーン等）、ここでは動きながらのイメージ豊かなリズム表現が
大切である。

この活動には、保育者のリズム楽器又はピアノの即興伴奏などの支えは、動きを発展させる為に
重要な働きをする。

4 絵本やお話また詩の中のオノマトペを活用した表現遊び

ア) 絵本やお話また詩の中に登場するオノマトペの部分に、その音に擬した音の出る身の回りのものや楽器を入れる。

- ・事例1「ブレーメンの音楽隊」の動物たちの動きを楽器で表現「トボトバ歩くロバ〜太鼓やギロ、老犬〜大小の木魚を、柔らかめのバチで、猫〜擬声楽器のねこや鈴、おんどり〜ラッパなど」それぞれ雰囲気醸し出す表現の工夫が考えられる。
- ・事例2「やきいもするぞ」焼き芋を食べた後のおなら大会である。りす〜いのしし〜うさぎ〜くま〜たぬき〜こげら〜おいものかみさまと次々におならのオノマトペ表現が続き、それぞれの動物たちへの優しいまなざしで語られている。どのような子どもたちの即興表現が生まれるのか、楽しみな題材である。

イ) 絵本やお話を動きで表現する。

- ・事例 絵本「ころころころ」には、丸い玉が様々な道を転がる様子が、表情豊かに表現されている。ここでも視覚に訴えてのリズム表現遊びである。

ころころ転がるボール・坂道・でこぼこ道・平らな道・嵐の道等々、ボールが転がっていく様子を、身体全体で表現する。

例) 横になって両手両足を伸ばして転がる〜ひざを両手で抱えて転がる〜でんぐり返し〜手で螺旋を描きながら、徐々に立ったり座ったりしながら移動〜螺旋を描きながらスキップなどで表現する。

次に2人組になって、転がし合ったり、手をつないで、片手で螺旋を描きながらスキップしたり、絵本に表れたボールになりきって表現する。

その他、谷川俊太郎の「もこ もこ」「どきん」なども格好の題材であろう。

V 終論

オノマトペ表現の音楽的意義について、以下のようにまとめる事ができる。

- 1) 領域「表現」「感じたこと考えた事を自分なりに表現する事を通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」のねらいを満たす。
- 2) 音楽の構成要素であるリズム・旋律・和声のうちのリズム面の育成に寄与出来る。
- 3) 表現要素である速度・強弱・音色の全分野についての育成に繋がる。

以上の様に、多くの音楽的意義がある事が分かり、子どもの即興遊びから創造性を育てる為の欠かせない素材として、オノマトペの積極的な活用は大きなメリットがあると考えられる。

さて、サウンドスケープと呼ばれる音環境は、生活の変化や環境の変化また機械化の発達等、世界中で変化してきている。子どもの周りで、これらの影響はさけられない。

子どもの聴覚は、幼児期に育てられる。年齢が幼いほど、音響そのものが好奇心の的である。この重要な時期に、高い音、低い音、明るい音、暗い音、さらに様々なイメージを想起させる音の体験は、成長する為の必要不可欠の栄養である。耳に入る音に似せて人工的に音を作り出して楽しんだり、また実際の音をまねて言葉にするオノマトペは、まさに幼児期にとって最適な栄養剤ではないだろうか。栄養

剤を調合するのは、保育者の豊かな体験とイメージ豊かな表現である。つまり、保育者自身も身の回りの音・色・形・手触り・動きに対して、常に鋭敏な五感を働かせている事が大切だということである。

最後に、音に囲まれた環境の中であって、そっと耳を傾けられるように、静寂な環境の用意も子どもたちの鋭敏な耳の感性を育てる為に必要不可欠である。今後の大きな課題である。

引用・参考文献

- 1 近藤綾・渡辺大介（2009）「保育活動におけるオノマトペー保育者 A を対象として」日本保育学会 第 62 回発表論文集 pp115
- 2 「つぶやきことば・こころのめ」第 40 集 第 41 集 2013 ～ 2014 大里学園静岡中原幼稚園・なかはら 保育園発行
- 3 原子はるみ・奥野正義（2007）「保育活動におけるオノマトペ表現の有効的機能に関する一考察」北海道教育大学紀要
- 4 山口仲美編（2003）「暮らしのことば 擬音 擬態語辞典」講談社
- 5 武田道子（1984）「幼児の生活に見られる音楽的行動」静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第 16 号
- 6 ELEMENTARUNTERRICHT Band 1（1983）Musik-und Kunstschule der Stadt Bielefeld
- 7 武田道子（1987）「西ドイツにおける音楽教育と日本への適用の問題ー導入期の指導を中心に」静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第 19 号
- 8 飯田秀一編「歌と遊び 12 ヶ月」1983 チャイルド本社
- 9 おくはらゆめ 絵・文「やきいもするぞ」2011 ゴブリン書房
- 10 山下明文 文・明藤休ミ 絵「ももたろう」2009 あかね書房
- 11 馬場のぼる 文・絵「ももたろう」1999 こぐま社
- 12 水谷彰三 作・スズキコージ 絵「ももたろう」2003 にっけん教育出版
- 13 松井直 文 赤羽末吉 画「ももたろう」1999 福音館
- 14 グリム童話 せたていじ訳・ハンス・フィッシャ絵「ブレーメンの音楽隊」1964
グリム童話 ささきたづこ訳・バーナデット絵「ブレーメンの音楽隊」西村書店
- 16 藪内正幸 文・篠原栄太 もじ・佐藤聡明 おと「鳥のなき声ずかん」1992 福音館
- 17 小宮輝之監修「生きもの鳴き声 ひみつずかん」（ディスク付き）2013 Gakken
- 18 元永定正 作・絵「ころころころ」1982 福音館
- 19 谷川俊太郎 作 元永定正 絵「もこ もこ」文研出版
- 20 谷川俊太郎 作 和田 誠 絵「どきん」1986 フォア文庫

